

## 行快による快慶様式の継承と展開—安阿弥様を中心に—

坂田 将馬 (青山学院大学)

快慶が創始した如来立像の形式の一つである「安阿弥様」はこれまでに多くの研究がなされてきたが、弟子行快による安阿弥様の継承と展開については未だ十分に検討されていないように思われる。本発表は行快によって快慶様式がいかに継承されたかを、安阿弥様を中心に検討するものである。

これまで安阿弥様は正面観における大衣と覆肩衣とが交わる着衣形式での分類が編年の基準となってきたが、安阿弥様の背面、ことに左肩から垂下する大衣の末端の衣文の処理にもいくつかの類型が認められる。すなわち、袋状にたくし上げて「品」字形に成形されるもの(A型)、左右交互に折りたたまれるもの(B型)、B型に変化を加えたもの(C型)などである。A型の祖形は奈良時代から平安時代初期にかけての如来像に多くみいだされ、快慶の作例中にあるのは京都・醍醐寺弥勒菩薩坐像(建久3年・1192)などにも確認される。快慶は品字形を奈良時代以来の復古的要素として安阿弥様に取り入れたとみなされよう。C型は奈良・光林寺阿弥陀如来立像(承久3年・1221)などに認められ、快慶の最晩年様式と関わるものであったと推察される。このような背面観の形式分類を、正面観の着衣形式による分類とあわせて検討することで、快慶在銘作例及びこれまで等閑視されてきた無銘の安阿弥様作例をも改めて捉え直してみたい。

ここに至って法橋時代の行快による安阿弥様作例を、従来通り正面観を中心に検討すると、滋賀・西教寺阿弥陀如来立像は快慶最晩年の作風をよく学んだ作風であり、それに遅れる制作と推測される滋賀・浄信寺阿弥陀如来立像や京都・極楽寺阿弥陀如来立像(嘉禄3年・1227)は行快の個性の萌芽が看取されるが、ここで背面の衣文処理をあわせて検討することで、行快による快慶様式の継承のありようを探ることとしたい。

続く法眼時代では、安阿弥様ではないが京都・大報恩寺釈迦如来坐像(安貞元年頃・1227)に目を向け、彼の独自の作風がいかにして成立したのかを考察し、それを踏まえて安阿弥様作例の滋賀・阿弥陀寺阿弥陀如来立像(文暦2年・1235)、大阪・北十万阿弥陀如来立像の位置づけを試みる。

ちなみに、行快の手になる来迎形阿弥陀三尊の脇侍像に目を転じると、快慶の脇侍像に比べて行快のそれは動勢表現に優れ、さらに頭髪の表現などにいわゆる「宋風」を摂取したところがあり、ここに行快の創意が認められよう。かつて発表者は快慶作と推定されてきた不動明王坐像を行快作の可能性があると論じ、行快は快慶の在世中からある程度自由な制作態度を許されていたと推定したことがあるが、脇侍像における創意もこのような視点から捉えられるのではなかろうか。快慶工房内における行快の位置が後の作風展開にいかなる影響を与えたかについても言及したい。